

# 核なき世界のかけ橋に



### 岡山市・朝日高1年 鶴見 仁美

私は小学校六年生まで広島に住んでいた。広島は原爆が投下され、多くの尊い命が失われたという過去を持つ都市だ。そのためなのか私は平和ということがどんなに幸せで、今私達が当たり前だと思っている生活が本当は悲惨で残酷な戦争というものを乗り越えて受け継がれてきたかけがえのないものだということを教えられて育ってきた。小学生だった当時の私の脳裏にもこの広島で起こった悲劇と戦争・核兵器の脅威が幾度にも渡るフィールドワークを通して焼きついていた。だから私はずっと日本は原爆を落とされたという唯一の被爆国であり、どの国よりも平和を願う国だと信じていた。

しかし私はこの記事を読んで本当にショックを受けた。どうして核兵器禁止条約と反対の立場をとるのだろうか。また戦争を始める気なのかと腹立たしく怒りを覚えた。確かに私は戦争をこの目で見ていないし肌で体験もしていない。でも核兵器の恐ろしさは知っている。でも核兵器の恐ろしさは知っている。なぜなら広島には原爆ドームや原爆資料館など核兵器が残した悲惨な爪跡を伝えるものがたくさんあるからだ。そしてこの岡山にも多くの岡山空襲に関する建造物が残っている。それらは戦争はするもんじやない、悲しむ者を生むだけだと訴えているように私は感じる。私達のもっと戦争と平和の在り方について考えるべきではないだろうか。もっと世界、日本に核兵器の恐ろしさを伝えるべきだと思ふ。

世界にはいまだに戦争を続けている国がある。考えや宗教の違いで戦争を起すことは何の罪もない人々を巻き込み、苦しめるだけのように感じる。今私達に必要なのは引き金を引く勇気なんかではなく、過去の過ちを次世代へ語り継ぐ勇気だ。

終戦から七十三年。かつて焼け野原と言われた広島には緑が

よみがえり、技術の進歩によって生活も便利になった。しかしその高度な技術を利用してより強い核兵器を作っている国もある。このままでは「核なき世界」の実現は夢のまた夢。世界で唯一の被爆国である日本は世界の先頭に立って今すぐ核兵器廃絶を訴えるべきだ。私達には忘れてはいけない過去の過ちを語り継ぐ義務がある。来年には「平成」という時代の節目を迎え、新しい時代へと突入する。私は平成世代の一人として「平和に成る」という願いの込められた時代での責務を全うし、次世代への平和のかけ橋になりたい。

## 広島原爆の日

広島はかつて「原爆の日」を迎えた。昨年、国連で核兵器禁止条約採択され、年々には尽力した非核兵器(NGO)の核兵器廃絶国際キャンペーン(INCAN)がノベル平和賞を受賞した。被爆者が核の受けた苦しみや苦しむべきだったことが、広島を結んだのだと言えよう。

種をまいた先人の一人が広島文理科大学・広島大)の地質学物質だったと、長岡省吾氏。73年前、原爆の傷痕を保存する重要な役割を果たすべく気付け、平成で初めて市街地に通り、燃焼させた石や瓦、溶解した鉛筆、ガラス瓶などを収集した。

## 被爆国の重い責任果たせ

## 社説

広島、長崎から広まった核兵器の無い世界となった核兵器禁止条約が、批准をめぐり定例で進んでいく。採択から1年となった昨年末までに終結し、地域を推進役のオーストラリアなど国と、日本、韓国などが上国などに批判する。その圧力をかけていることもされ、条約推進の断絶が深まっているのは残念と云うほかない。

米ロ英仏中は国連の採択を認め代わり、核軍縮義務を課す核拡散防止条約(NPT)一たびが核軍縮、不拡散の国際組織だと言及するものの、軍縮は停滞している。

ランブ・米政府は「使用した核兵器」と称される小型核兵器を盛り込み、「核なき世界」は実現のいた。6月の米朝首脳会談で北朝鮮が「完全な非核化を約束した」といえ、先行きは不透明だ。

日本が核兵器禁止条約に反対の立場を取っていることも、被爆者は強い不満を抱いて、重く責任を政府は改めて見直して、実践に努めべきだ。

2018.8.7

2018年8月7日付 山陽新聞

## 寸評

原爆で多くの命が失われた広島の大悲劇を受け止め、核兵器禁止条約に反対の立場を取る日本の姿勢に疑問を突きつけました。平和を願う強い思いが行間から伝わってきました。